

書名：**授業を変える**
認知心理学のさらなる挑戦

編著者：米国学術研究推進会議
訳者：21世紀の認知心理学を創る会
監訳者：森敏昭・秋田喜代美
出版社：北大路書房
出版年月：2002年10月
総ページ数：331ページ
ISBN：9784762822759



推薦者

泰山裕

鳴門教育大学大学院講師
教職実践力高度化コース

～授業と理論をつなぐ～

教育は様々な要因が複雑に入り組んで構成される。

今日うまくいった実践が、明日も同様にうまくいくという保証はない。そのために、多くの先生方が日々、努力を重ねている。

教育に「正解」はない。だからこそ、現場の先生方はいろいろな視点をもとに授業を作り、子どものために毎日努力を重ねている。

この努力を「職人芸」という一言で片付けてしまうことは、非常に簡単だ。しかし、そうすることで、これまで積み重ねてきたものに意味がなくなってしまう。

教育には「正解」はないが、多くの先生方が気をつけている「コツ」のようなものがある。それが「理論」である。

教育において「理論」は「実践」の中から生まれ、また、「理論」は「実践」をよくするために用いられるものである。

しかし、現実には理論と実践の乖離が起きる。理論通りに授業をしてもうまくいかない場合がある。なぜなら、理論は一つの視点を提供しているだけであり、教育に関係するすべての要因を示したものではないからだ。

認知心理学は常にこの問題と直面してきた。

認知心理学という学問は本当に授業をよくすることにつながるのかという問題である。この本はその問題を正面から捉えたものである。

そもそも学習とは何か、児童・生徒はどのように学んでいるのか、そのために教師はどのように授業をデザインすべきなのか、教師はどのように成長していくのか、このような問題についての最新の研究を踏まえて紹介している。

授業を理論的に捉えるということは、授業が上手な先生の技を言語化し、自分の糧にするということである。「なんとなくすごい」では、自分の糧にならない。それを客観的に捉えることで、自分がすごい授業をするために気をつけるべきことが見えてくるのである。

いろいろな授業を見たときに、この授業は良い授業なのか、良くない授業なのか、そしてそれは何故か、何を改善すべきか、ということを語れるようになってほしいと思っている。それは、自分の授業改善につながる。

この本にはそのためのヒントがたくさん詰まっている。

少し、難しい表現もあるかもしれないが、是非、この本に目を通して、「教育」というものに対して、これまでどのような議論がされてきており、どのように捉えられているのかについて見てみてほしい。

そこで得られたヒントはおそらく、自分の実践を客観的に捉えることにつながり、それは「学び続ける教員」になるために必要な視点につながるはずである。

